

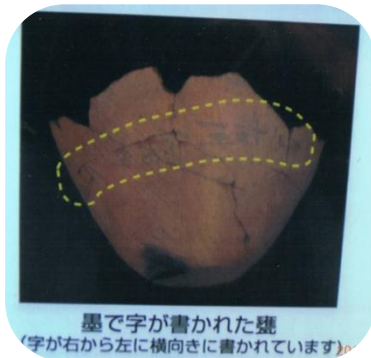
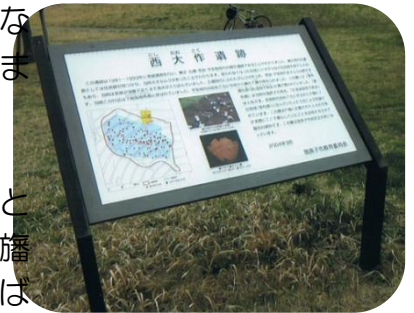
わが街、わが地域の史跡・遺跡を訪ねる(1)

— 南新木2丁目の「丘の公園」と西大作遺跡 —

我孫子市史研究センター
いいじろかずこ
飯白和子(吾妻台在住)

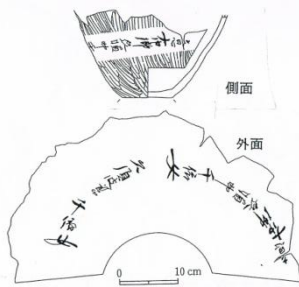
新木は、古くからのお寺や神社の他に、遺跡や史跡も豊富な所で、その一部は公園として保存されています。散歩がてら訪れてみてはいかがでしょうか。今回は、南新木の「丘の公園」付近の発掘調査で判明した話です。「丘の公園」は、南新木2丁目6番地の手賀沼を望む台地の縁にあります。「西大作遺跡」と書かれた案内板が設置されています。

南新木は、成田線より南側と布佐の北大作、西大作等の地域が区画整理されてできた住宅街です。区画整理事業に先立ち平成3～5年に発掘調査が行われ、縄文時代前期の住居跡84軒と土坑群、古墳時代の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡16軒、中近世の土坑、土坑墓などが発見されています。地名をとって「西大作遺跡」と呼ばれています。



墨で字が書かれた甕
(字が右から左に横向きに書かれています)

縄文時代前期は、今から6000～5000年前、縄文海進の最高期のころといい、そのころの手賀沼は、霞ヶ浦・印旛沼を合わせた古鬼怒湾(こきぬわん)と呼ばれる一つの内湾で太平洋に続いており、海水準もかなり高かったといえます。縄文の人々は、西大作の地に大きな集落をつくり、住居跡の貝塚からはハマグリ・オキシジミ・アサリ・マガキなどの貝殻が発掘され、そのうちハマグリが全体の87%を占めハマグリを選んで採っていたのではないかとされています。住居跡に貝殻を投棄したのも祭祀目的であったと考えられるといえます。



「意布郷久須(波)良部」の墨書土器(西大作)
『我孫子市史 原始・古代・中世篇』342頁

奈良・平安時代の集落は、南新木4丁目の羽黒前にあった同時代の大きな集落の分村的なムラと考えられています。ここからは「意布郷久須波良部千依女」(おぶごうくすはらべちよりめ)と墨書された甕が出土し、土坑墓の骨臓器として使用されていたと考えられています。

「意布郷」とは古代の地名で下総国相馬郡(我孫子市域はここに含まれていました)には、「大井、相馬、布佐、古溝(ふるみぞ)、意部(おぶ)、余戸(あまるべ)」の6つの郷があり、そのうち意布郷(意部、於賦とも書く)の所在地が分からなかったのですが、ここから発見された墨書土器により有力な候補地となりました。

「久須波良部」というのは、『正倉院』文書に「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」(721年)という奈良時代の戸籍簿があり、その中に65名の「藤原部」姓が書かれているといえます。この藤原部を名乗る人々が、天平宝治元年(757年)に久須波良部に改姓を命じられたもので、その子孫がこの地に居住していたということが分かったのです。この甕は、市の文化財に指定されています。(引用文献:『我孫子市史 原始・古代・中世篇』、『我孫子市史研究16号』、あびこ電脳博物館資料)